HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文学システムと文学加工：経験的文学理論の一問題点
Author(s)	名執, 基樹
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 197-214
Issue Date	1993-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25960
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P197-214.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

文学システムと文学加工
—経験的文学理論の一問題点—

名　執　基　樹

0.

シュミット(S. J. Schmidt)の「経験的文学研究の概要」[2]が出版されてからすでに十年以上がたつ。文学をテクストの問題としてではなく人間の一活動（「文学行為」）として捉え直した時、初めて文学という現象のメカニズムに迫る経験的な研究が可能になる。「概要」はこの認識をもとに文学の経験的研究に包括的な理論基盤を与えようとするものであった。「概要」は解釈中心の文学研究を徹底的に拒否する姿勢をその内に秘めており、それ故、いまだ評価が分かれる本である。しかし、経験的文学研究のその後の発展とその中でこの「概要」が果たしてきた役割、さらには狭い意味での経験的文学研究の枠をこえた、シェーネルト(J. Schönert)やイェーガー(G. Jäger)らの様な「文学の社会史」ないしメディア史的な研究をめざす研究者などへの刺激という事を考えるならば、この「概要」の影響にはやはり無視できないものがあると言える。91年にはsuhrkamp社からあらためてTaschenbuch版が出版されたが、これもそうした評価のあらわれと見る事ができる。

「概要」とそこで提示された経験的文学理論(Empirische Theorie der Literatur)についてはすでにこれまでに何度か取り上げられている[3]。にもかかわらず、ここで再度取り上げるのには理由がある。理由の一つは、この十年余りの間に「概要」をめぐる議論状況にある種の変化が見られるようになった事である。具体的に言うと、記号論的・（テクスト）言語学的な考察から社会学的な、取り分け、システム理論に触発されたマクロ社会学的な考察へと議論が移って来ているのである。従って、こうした変化を踏まえた上でそこでの問題点を新たに整理し直し、今後の議論の方向を明らかにしておく必要もでてきたのである。理由のもう一つは、日本での研究方法の再考の必要性である。これまで日本での経験的文学研究の受容はドイツでの動きに平行した形で行われてきた。具体的に言うと、ドイツで文学受容の経験的調査が重点的に行われていた80年代には、日本でも受容行為を調査の主対象してきたのである。もちろん、こうした研究が重要である事は確かだが、その一方で、日本で外国文学ないし外国文化の研究を経験的に行うにはどうしたらいいのか？というような、われわれ独自の課題設定に関する議論はあまり行われて来なかったのである[4]。自国には存在しない文学活

動の研究を行うためには当然の事ながら本国とは別の研究の運営構造が必要となる。その為にはそれに必要な課題設定や方法論についての議論もなされなければならない。この点において、受容行為を中心に議論をすすめてきた80年代前半よりも、マクロな観点から文学活動全般を対象として議論している目下の状況の方が国際的に文化現象を相手取らなければならない我々にとって示唆に富む部分が多い。この理由からもあらためて再度、理論的問題を取り上げる必要が出てきたのではないか、と思うのである。

具体的には、ここでは文学システムと文学加工いうテーマを論じる。というのも、この文学加工という概念こそ「概要」の問題点を最も色濃く反映させている概念の一つであり、また、同時に今後の研究の展開を考える上でも重要で、従ってその意味からも議論される必要がある概念の一つだからである。

1.

まず、「概要」が提示した経験的文学理論とはどういうものであり、また、その後どのような点が議論の対象になってきたのか、簡単に振り返っておきたい。

すでに冒頭で述べておいたように、経験的文学研究は文学を人間の活動によって構成される現象と捉える。これはシュミットらジーゲンの研究者だけでなく、ハイデルベルクのグレーベン(N. Groeben)ら、アムステルダムのフェルダースドンク(H. Verdaasdonk)やファン・レース(C. van Rees)らといった他の研究グループにも共通する認識である。しかし、これは、それにとどまらず、60年代以降のいわゆる「方法論争」の時代を経て登場してきたドイツの様々な文学研究の流れの中に見え隠れしていた視点でもあった。学生運動に代表される60年代末のいわゆる批判の時代には、カノンとされた作品を相手に作品解釈によってその心髄にせまる事を旨とするこれまでの文学研究のありかたが批判の対象とされた。そして、カノンをカノンとする社会的条件が問題とされ、作品の「意味」の本来の出現地点としての読者の存在が「発見」され、また、文学現象を形作る重要なメカニズムの一つとして、出版やメディアなどにも目が向けられるようになった。「この事は、文学研究がますますテクストの学問(Textwissenschaft)から行為についての学問(Handlungswissenschaft)に変化していった、という事を意味していた。そして行為の学問としてこそ、理論的にこれらの全てのパースペクティヴをまとめあげる事が出来るように思われた」こう、フィーホフ(R. Viehoff)は当時の経験的文学研究の成立の背景を振り返っている[5)]。

「概要」はこうした流れを背景にし、その流れを経験的文学研究という形で積極的に押し進めようとする意図から書かれたものである。その理論の特徴は次のような点にある[6)]：1)「概要」は文学をある種のコミュニケーション行為、すなわち、文学コミュニケーション行

為(literarische Kommunikationshandlung)として捉える。ここで重要なのは文学の特性をテクスト構造からではなく文学行為の実用論的側面から捉える観点である。そもそも文学をテクストの構造上の特徴によって定義する事はできない。内容や形式に関する限定が文学には事実上無いからである。文学活動においては、それがどんな構造上の特徴を持つものであろうとも、文学として提示されたテクストは文学として扱われ、評価されてゆくというのが実態なのである。そこで「概要」は逆に、むしろ、この提示されたテクストを＞文学として＜扱いあうというコミュニケーション様態についての暗黙のコンセンサス、すなわち、慣習(Konvention)の存在が文学活動の基盤となっていると考える。2)「概要」によると、＞文学として＜扱うというのは、具体的にはテクストを次のような受容対象とみなす、という事である：a.文学においては行為者はテクストを主体的な意味体験を行うための体験素材とみなす。つまり、個々の読者はそれぞれ自己の私的な情動や認識や価値観を前面に押し出し、それに結び付けて作品体験を行う。b.その際にはもっぱら美的な価値が読書行為の指針となる。美意識や文学観は多様で可変的なものだが、それが何であるにせよ、文学活動においては個々人はいずれにせよ自己の持つ何らかの美（学）的な意義期待を前面に押してテクストに接する事になる。「概要」はこの二つの期待の様態を社会的に制度化されたものであるとみなし、多価値慣習(Polyvalenz-Konvention)、美的慣習(Ästhetik-Konvention)と名付けて仮説する。3)この二つの慣習下でテクストを扱いあう事で文学活動は展開される。「概要」は、その際、テクストに対する関係のありかたから理論的にそこでの文学活動を4つのタイプにモデル化する。a.詩や小説などのテクストを創作する文学創作行為(literarische Produktionshandlung)。b.出版や書籍流通など、テクストを媒介させる文学媒介行為(literarische Vermittlungshandlung)。c.読書や観劇などの、テクストを受容する文学受容行為(literarische Rezeptionshandlung)。d.文学批評、翻訳、映画化など、テクスト受容をさらに別のテクスト製作につなげる文学加工行為(literarische Verarbeitungshandlung)。これらの行為は様々な形でお互いに連鎖し、結びつきあい、文学プロセス(Literaturprozeß)を形成する。こうして出来た文学プロセスは、さらに、全体として一つの社会的活動領域、文学システム(Literatursystem)をなす。そして、この文学システムが経験的文学研究の研究対象とされるのである。

行為としての文学という視点、また、文学を創作、出版、読書、批評などの多様な活動によって構成される社会現象と捉える視点は必ずしも新しいものではない。しかし、背後のメカニズムにまで踏み込んで徹底して文学を人間の一活動として捉え、テクスト中心の文学観を乗り越えようとしている点で「概要」は比類のないものになっている。それまで文学の特徴はテクスト上の問題として、すなわち、何らかのシンボル操作の形をとって現れるものとして議論されて来た。しかし、シンボルレベルで文学の特徴を把握しようとするかぎり、表現形式の変動も文学の多彩なあり方も認めれない保守的・独善的な理論しか出て来ない。こ

の事は、逸脱論的な文学把握、あるいは、受容の側面を強調したものの、空所のようなテクスト中心的な概念でしか文学を把握できなかった受容美学のような文学理論にも当てはまる。提示されたテクストを文学として扱うという行為レベルのコンセンサスを基盤としているからこそ、文学はシンボルレベルで多様性を許すし、シンボルレベルでの逸脱があろうとも文学活動のプロセスは全体社会の中で空中分解せずに済んでいるのである。

「概要」以降、経験的文学研究では次の二つの点が重要な問題点とみなされ、その後ひきつづき考察にされてゆく事になった。一つは、慣習についての仮説の実証の問題。もう一つは、文学を社会システムと捉える視点の問題である。80年代の経験的文学研究においては、まずは、第一の問題が最重要課題とみなされ、テクスト受容に関する多くの経験的な調査がなされた。これについては、幾つかの問題点がいまだ残されてはいるものの、一応の結論は出たと言っていい[7]。「テクストの文学的な理解を条件づけるには、読解目的が拘束的な要因としてそこに含まれてさえいれば、コンテクストを明確に構成化するだけ十分事足りる」(モイチュ(D. Meutsch))[8] というそれである。つまり、文学活動を基礎づける要因としては、テクストの構造性よりも行為状況そのものについての判断（慣習の介在）の方が実際に上位に立つ、という仮説の核心点がとりあえず確かめられた事になったのである。これに対し、文学システムというアイディアはさらに様々な理論吸収を経てようやく80年代の後半から本格的に議論されるようになった。シュミットの「18世紀における社会システム文学の自己組織化」[9]はその最初のまとまった成果である。ここでは「概要」の考察がルーマン(N. Luhmann)やヘイル(P. Hejl)やマトゥラーナ(H. Maturana)らのシステム理論とむすびつけられ、文学システムを自己組織的システムと捉える観点が打ち出されている。つまり、創作、媒介、受容、加工の行為の連鎖は単なる一方通行的なコミュニケーションプロセスを成すのではなく、絶え間なくお互いを条件づけ、作用しあう円環的な連鎖のプロセスを構成しており、これによって、文学は自らの活動を通して動的に自らのあり方を創出し続ける自己組織的システムとなっている、と言うのである。その際、慣習については、他の社会的活動との弁別を条件づけ、文学行為の連鎖（ルーマン流に言うなら接続可能性(Anschließbarkait)）を保証する存在（＝システムの境界(Grenze)）であるとして、再度その意義が強調される事になる。こうした文学の社会的メカニズムの捉え方は、折りからのドイツでの文学研究内でのルーマン＝ブームもあって、注目を得るようになった。しかし、まさにこうしたマクロ次元での議論の段になって、あらためて「概要」、そして、さらには、その延長線上で構想された文学システムの観点を問い直そうという動きが、それも、ジーゲンでのシュミットの同僚を中心に出て来るようになった[10]。実は文学コミュニケーション行為という観点はマクロ社会学的なプロセスを問うにはあまりにミクロな説明原理だったのである。

2．

さて、ここで私が焦点を当てたいのは文学加工である。文学加工とは、先述したように、具体的には、文学批評、映画化、翻訳などの行為を指す概念である。理論的には、「概要」では、文学加工とは文学テクストと「加工関係」を持つ新しいテクストを生産する活動の事であり、その際、「加工関係」を持つとは、1）文学として受容されたテクストを加工作業の出発点とし、かつ、2）そのテクストを言及対象に持つ新たなテクストを生み出す事である、と定義されている[11]。この文学加工と慣習との関係は特殊である。文学批評の場合を考えてもらえれば分かると思うのだが、この種の活動そのものが直接、文学的なコミュニケーション様態を取る訳では（必ずしも）ないからである。文学加工の場合に決定的なのは、むしろ、対象となるテクスト（の方）が＞文学として＜処理されている事、つまり、慣習の「間接的」な関与である。具体例としては、検閲などでは法的なコミュニケーション様態の下でテクストが処理され、文学批評などでは文学的なコミュニケーション様態の方が優勢となる、というような例が上げられる[12]。つまり、「間接的」にではあるが、文学加工に関してもやはり慣習の関与が文学システムへの帰属性の条件となっている、と捉えられる事になるのである。

しかし、一見、明快に見えるこの観点も詳しく見てゆくならば幾つか問題点を持っている事が分かる。以下、これを順を追ってまとめてみると。

1）「概要」では文学活動を、テクスト処理のありかたから、文学創作、文学媒介、文学受容、文学加工の四行為の形にモデル化した。しかし、詳しく見てみるならば、文学システムがこの「四行為モデル」では単純に把握できない複雑さを持っている事が分かってくる。問題は特に文学媒介と文学加工をめぐって現れてくる。文学媒介の場合、実際には、そこには、出版社、取次、書店、図書館といった複雑で多種多様な機構が含まれており、それらをまとめて文学媒介行為と言ってしまうのは理論としてあまりに単純すぎる。文学加工の場合には問題はさらに複雑である。文学媒介の場合にはそれでもテクスト媒介という一つの活動領域が問題となったのだが、文学加工においては、そうした活動領域の特定さえも出来ないからである。詳しく見てゆくと、少なくとも次の二つの異なったタイプの活動がそこに含まれている事が分かる。a）異なるメディアや異なる文化の文学システム間を仲介し、文学テクストから再び（広い意味で）文学的に受容されるテクストを生産する活動のタイプ（映画化、小説化、翻訳）、b）文学システム内でメタコミュニケーション的に文学コミュニケーションに関わり、そこから非文学的な二次的なテクストを生産する活動のタイプ（文学批評、日常でのいわゆる「文学についての会話」）。この事は、一行為タイプを定義する筈の文学加工の概念が、実際にはなんらまとまった社会行為のクラスを定義しえていない、という事を意味

している。2）この文学加工の概念は、さらに、この二番目の、文学批評のようなメタコミュニケーション的な活動の把握をめぐって弱点をさらけ出す事になる。というのも、文学批評は本来単純なテクスト処理ではなく、テクスト以外のさまざまな主題や題材を取り扱う活動だからである。実は、これはすでに一度シュミット自身によって指摘されていた問題でもある。つまり、文学批評は実際には、新刊書やその作者についての情報提供、作者、読者、文学思想をめぐる批判的公共性の構成、文学活動への介入、＞文学産業＜のイデオロギー批判的分析等の様々な機能を持っており、従って、文学批評を十分に捉えるためには加工概念の拡大が必要となってくる、と反省されているのである[13]。ホーエンダール(P. U. Hohendahl)は、そもそも、「マスメディア（新聞、雑誌、ラジオ）内での新刊文学の評価行為というドイツに根付いている文学批評の把握は実状を正しく捉えたものではなく」、むしろ、文学批評はもっと一般的に「文学についての公的コミュニケーション」として捉えるべきものだ、と主張している[14]。文学加工の概念では文学批評のようなメタコミュニケーション的活動を十分に覆い切れないのである。3）この問題をさらに鮮明にあらわしているのが、加工関係をほとんど持たない特殊なメタコミュニケーションの存在である。マニフェストや文学論争といったものがこれに当たる。しかし、あくまで慣習を文学システムへの帰属性の条件と見るならば、これらは文学には関与しない活動として扱われる事になってしまう。これらの活動がテクストを直接対象とする行為ではない以上、そこに多価値慣習や美的慣習の関与を認めることは極めて難しいからである。4）さらに、もう一つ決定的な問題がある。これらのメタコミュニケーション的な活動タイプは、翻訳などの場合と違って、本来の文学活動の傍らに独自の二次的なプロセスを構成する。文学批評を例に取って言うなら、そこには批評家、批評の読者、媒介機関が関係しており、文学批評はこの関係の中で新聞や雑誌の文芸欄などの形でメディアの一ジャンルとして成立しているのが実態なのである[15]。従って、これを一行為に還元したり、また、これを翻訳のような行為と同等に扱ったりする事はかなり無理な理論構成と言わざるを得ない。

こうした問題にもかかわらず、「概要」以降、理論的に文学加工の概念を包括的に扱う議論はこれまでほとんどなされて来なかった。しかし、これはこの概念下にまとめあげられた対象領域の不一致という点から見るなら、逆に当然の成り行きであったとも言える。しかし、文学批評という特定の話題に関する取り組みは、経験的文学研究においては、逆に多い[16]。ここで興味深いのはフィーホフの考察である。フィーホフは、ある論文の中で、文学批評が文学システムの中で果たす機能は「文学についての公的な会話を方向づける事」にあり、それによって文学批評は「文学行為の活動条件を（少なくとも間接的に）コミュンケーション的に調整する」と仮説している[17]。そして、その観点から、そうしたこれまでの取り組みを総括しつつ、その「コミュニケーション的な調整機能」とは、具体的には、1）文学把握につい

てのコンセンサスの形成への関与、2）文学を取り上げる事で社会に対して文学を認識可能なものにする作用（この事で、一方において文学の伝統形成に貢献し、他方で、文学を一般的な会話の素材にする）、3）個々のテクストの受容方法についての理解への影響、4）信頼可能なテクストへの意味付与のありかたの測定、5）文学テクストのカノン化、ないし、過去の素材、テーマ、ジャンルなどとテクストとの関連性の構築などである、と洗いだしているのである[18]。フィーホフ自身はここではまだ文学加工の概念を使って論じているのだが、そこで事実上打ち出されているのは加工関係に注目する「概要」の理論そのものではなく、むしろ、文学批評を文学についての＞メタ情報＜を提供する活動と見る視点である。つまり、フィーホフは、文学プロセスと文学批評との接合点を加工関係や慣習にではなく、提供されるメタ情報に見ようしているのである。そもそも、文学批評もメディアによる活動であり、従って、理論的には情報構成のプロセスの一つとして捉える事が出来る。他のメディアによる活動と異なる点は、そこで構成されるべき情報が文学についての情報に限定されている、という点だけである。この観点から見ると、フィーホフの視点もメディア論的には至極順当なものと言える。思うに、文学批評をテクスト中心的に捉えるのはその背景に文学研究に伝統的なある種の解釈学的態度があるからではないだろうか。文学研究内では、しばしば、暗黙の内に文学批評はテクスト解釈として捉えられる。この「解釈」の概念が致命的な曖昧さを持っているのである。そもそも、この概念の下では、受容行為も批評行為も解釈とみなされる。本来、別の意図や欲求を背景とし、別の行為原理にもとづいて行なわれる筈の二つの活動の差異が無視されてしまうのである。この事は、実は、「概要」の旧来の文学理論に対する批判点の一つでもあった。そこで、「概要」では、文学受容と文学加工の二つの概念を持ちだす事でその両者を明確に区別し、テクストに直接たずさわるのはあくまで受容行為であり、文学加工はその行為結果として得られるテクスト像を出発点にした新たな行為である、としたのである[19]。しかし、「概要」のこの捉え方はあくまで受容行為の延長線上に加工行為を位置付けたものであり、その意味で、依然、テクスト処理の観点から文学活動を捉えた、テクスト中心的な把握方法であったのである。批評家が活動の出発点にテクストの受容体験を置くのは最もよくあるケースである。しかし、原則的には、テクストについての判断のみならず、文学についてのあらゆる問題意識が批評家の出発点となり得る。一般化して言うならば、文学批評は、作品、作家、美学といった様々な領域にわたる〉文学についての意識〈を素材とし、それを社会的に伝えあう活動であり、テクストに従事する作業というよりも、社会的な文学像の構成に従事する活動なのである。

マニフェストや論争など「概要」が覆えなかった活動を含めたメタコミュニケーション的な活動を包括的に説明するためには、テクスト中心的な把握に替えて、それを「文学」についてのメタ情報の構成にたずさわる二次的なプロセスと捉える事がどうして必要になってく

る。この方向で捉え直してこそ、メタ情報の生産・媒介・受容のプロセスの総体として批評を分析する観点もでてくるだろうし、また、翻訳や映画化の様な活動との差異を的確に捉える可能性も現れてくる。しかし、こうした観点をそのまま「加工概念の拡大」として経験的文学理論の中に取り込めばそれで済むかというと、問題はそう単純ではない。この文学加工をめぐる問題はもう一つのより大きな問題に密接にむすびついているからである。シュミットは慣習に注目する事で文学システムの構成原理についていずれにせよ明快な説明を用意した。多価値慣習と美的慣習下でテクストを＞文学として＜処理しあう活動が文学コミュニケーション行為であり、文学システムとはそうしたテクストをめぐる文学コミュニケーション行為の連鎖から成り立っている、というそれである。しかし、取りこぼしていた側面を拾い上げようと加工概念を「拡大」させるとなると、どうしても、この慣習概念を中心に置いた文学システムの把握そのものから捉え直さざるを得なくなる。文学加工の問題は、このシステム把握の弱点である、文学システムはテクスト処理の単純なプロセスとしては把握し切れないという問題点をさらけださせてしまうからである。

3．

そもそも、システム理論の最大の課題は一つの現象（システム）がそれ以外の現象（環境）の中からいかに立ち現れてくるかを説明する事にある。ルーマンが「システムと名づけられる特別の種類の対象…を取り上げる」理論ではなく「ある一つの差異、つまりシステムと環境との差異」を考察対象とする理論であると自らの理論について強調するのもこのためである[20]。従って、そうした区別、つまり、システムの境界ないし帰属性の原理の解明はシステム分析の中心課題の一つとみなされる事になる。慣習の働きに注目する事で文学システムの帰属性を説明しようとするシュミットのアイディアは、何よりもこの問題にたいする積極的な回答を意味していたのである。しかし、マクロ社会学的なレベルでの議論に移ってゆくにつれて、ジーゲンのシュミットの同僚の間からは、実際には社会的プロセスは慣習のようなミクロ社会学的なカテゴリーによって特定のシステムに割り振れるほど単純な性質のものではない、という点が次々と指摘されるようになって来た[21]。文学のプロセスは現実にははるかに複合的な性格を持つものだったからである。この複合性の把握をめぐっては、バルシュ（A. Barsch）などからメタコミュニケーションなどの階層性を文学システム内に仮説する事で問題を克服しようという提案がなされてはいるが[22]、それも決定的な対案とはなりえていない。その複合性は単なるシステム内部の階層的秩序の問題というよりは、むしろ、文学という現象の拡散性にかかわる問題だからである。批評のようなメタコミュニケーションの場合も含めて、文学は雑多なプロセスに支えられた現象として成立している。例えば、作家と出版社の関係は

事実上、労働上の関係に支えられたプロセスであり、出版社から読者に至るテクスト媒介のプロセスは書籍という商品の流通のプロセスとして構造化されたりしているのが実態である。また、同一のコミュニケーション行為であったとしても、それが含まれる制度的な枠組みのありかたによって文学プロセスへの関係度は異なってくる。文学賞はドイツでは文化政策の一環として行なわれるが、日本では出版社が作家を審査員に迎えて行う、ある種の新人登用制度としての位置価を持つ。端的に言うならば、制度や役割のようなより上位に立つカテゴリーを飛び越して、コミュニケーション行為のような言語学的な概念で社会的プロセスを追うことには無理があるのである。

こうした問題をもっとも徹底的に考察しているのはルッシュ(G. Rusch)である[23]。彼は、慣習のような「コミュニケーション手段の使用のモード」は文学現象の基本条件にしか過ぎず[24]、これとプロセスとしての文学の運営のレベルとは別だと捉える。そして、運営構造という観点から文学を捉えるなら、文学はそれ自身で自律したシステムをなすとは到底言えず、むしろ、全体社会の中ではじめて運営され得る性質のものと捉えなければならないと見る。「美的・芸術的な文学の現象領域だけをとってみても、そこには決して明確に区分できるような領域は存在しない。文学は社会の全体システムの中のさまざまな位置や箇所に姿を見せる。個人的・公的な領域、商業的・非商業的領域、職業や余暇、さまざまなメディア（書籍、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、劇場など）等々。文学現象は…全体システムの中に分配されているのである」[25]。この全体性ゆえに、文学という現象には「非同一的な構成素のクラスと（同じように）非結束的なプロセスが含まれ（得）る(dirty systems)」事になり、そこでの「構成素間の相互作用は常に複合的で(strange systems)、システムの境界は不明瞭(fazzy systems)」なものとなる[26]。ここから、ルッシュはバルシュとは逆に、システムの構造を抽象的に定義づけるのではなく、むしろ、具体的な調査との関連の中から一つ一つのプロセスの構造を浮かび上がらせてゆくような「開かれた要素存在論(offene Komponenten-Ontologie)」に立つべきだと提案する[27]。

このルッシュの観点からすると、システムの帰属性の問題はもはや理論的な課題ではなく、経験的な問題でしかないという事になる[28]。しかも、同時に、運営体としての文学と全体社会との間には明確な区分が存在し得ない事も認めなければならなくなる。これは、文学システムという概念の理論的価値にかかわる深刻な問題の提起を意味する。ドイツの文学研究の中で率先的にシステム理論と取り組んできたジーゲンの研究グループの中から、こうした文学システムの概念そのものを批判する議論が出てきた事は興味深い。しかし、これが旧来のシステム把握の反省という点を越えて、実際に、文学システムの概念そのものの放棄をうながすものになるかどうかは、簡単には判断出来ない問題である。本来、システムの区分の問題では、文字どうりのシステムの「境界」の存在を指摘する事は必ずしも必要ではなく、現象

の＞結束性＜が何によって条件づけられているかを明らかに出来れば十分である。例えば、ルーマンは象徴的に一般化されたコミュニケーションメディア(symbolisch generalisierte Kommunikationsmedien)としてそうした要因を捉え、これを「触媒」として社会システムが構成されると見る[29]。そして、その象徴的に一般化されたコミュニケーションメディアの特徴と社会システムの構成上の特徴との対応関係を追うのである（芸術の場合、美／醜という社会的に不確定な先優価値を持つ前者のありかたと、後者の拡散的な構造との関係）[30]。これと、文学現象の基本条件としてのコミュニケーション手段の使用のモードとプロセスの運営のレベルを分けて捉えるルッシュの観点は、意外と近い。こうしたルーマン理論との対決という問題を含めた理論面での議論の余地が未だ残されているのである[31]。一つこれまでの議論から言える事は、歴史的に見た場合、確かにルーマンのような捉え方は成り立ち得る、という事である。シュミットは先に触れた「18世紀における社会システム文学の自己組織化」の中で、今日のような文学活動のありかたが18世紀の社会の構造変動を背景に成立したものである事を分析している。それによると、この変動の過程を通して、文学は、一方で、コミュニケーション様態としては、特定の内容的・形式的な規定をのがれ、もっぱら、意味体験の主観的な側面に集中化する事をコンセンサスとした存在として受け入れられるようになり、他方で、社会的現象としては、宮廷のような特定の共同体を離れ、作者、読者、出版社、批評家等の活動の連鎖によって展開されるものとなる。つまり、コミュニケーションの様態の成立とそれを営む社会的プロセスの整備とが平行現象である事を歴史的な分析によって確認する事はできるのである[32]。いくつかの変化はその後確かにあるものの、この歴史的過程で得られた文学現象の基本的な組織形態は現在に至るまで柔軟に維持され続けている。この観点から見るならば、文学は文字通りに全体社会に「分配」されている訳ではなく、そこには、文学の運営に集中してたずさわる比較的安定した一連のプロセスの構造化（専門（職）化、制度化、プロセスのルーティン化など）が成されていると見て行くことが出来るのである。

ここでは単に重要な論点を指摘するに止め、目下継続中の議論にこれ以上立ち入る事は避けておきたい。しかし、現時点で一つ確実に言えるは、文学プロセスの構造上の複雑性を無視したモデル構築は、結局の所、文学現象の実像の解明を課題とする筈の経験的文学研究にとって有益なものとはならない、という事である。この意味でルッシュの立場は健全な方向性を示すものと言える。実際、システム概念の独り歩きとも言える現代のドイツでのシステム理論の受容状況の中にあって、ジーゲンのグループの発言からはこうした受容状況そのものへの批判と受け取れるニュアンスが感じられる。そもそも、対象現象の具体的構成を等閑視したシステム概念の応用は単なるシステム論のカテゴリーの比喩的使用でしかない。概念装置の彫琢という意味からも、抽象的議論を具体的調査に連動させてゆく必要があるのである。目下、文学システムの概念をめぐっては議論は継続中というのが実状である。しかし、

この観点から言うなら、その議論の中で改めて経験的調査の必要性が自覚され、又、新しい理論構築の方向性として、複合的なプロセスによって構成される現象としての文学の把握、という課題が浮かび上がってきたことは、逆に、極めて重要な理論的成果だと言っておく事が出来る筈である。

4.

それでは、あらためて文学システムを複合的なプロセスによって構成されるシステムとして捉えた場合、「文学加工」はどういう研究課題として見直されなければならないのか？以下、なるべく簡単に私の観点をまとめてみたい。

論点は大きく分けると二つある。まず、一点目は、マクロ社会学的な研究の際の課題設定の問題である。先に述べておいたように、「文学加工」の概念はテクストとの形式的な関連性に注目した概念であり、社会的行為の構成原理をモデル化したものとは言えない。翻訳や映画化などの、いわば、媒体の変換をはかる行為タイプと批評のような行為タイプとを同一視するわけにはいかないからである。しかし、行為としてそれぞれを区別するだけではやはり不十分である。実際の研究の観点としては、プロセスのレベルの課題設定が必要となって来る。例えば、具体的な例としては：メディアミックス(映画化、小説化、など)、国際的なシステム関連（翻訳)、文学的公共性（文学批評)、作家や読者のそれぞれの私的ないし職業的領域での文学をめぐる会話など。この際、特に文学批評に対しては、これまで以上にそのプロセスとしての側面を重視し、文学についての世論形成の装置としての構造をとらえてゆく必要がある[33]。こうした個々のプロセスの規模や構造を知る事は文学システムのメカニズムを知る上での重要な課題となってくる筈である。もっとも、これは文学加工の問題にかぎらず、マクロレベルで文学現象を研究する際に一般的に言える観点である。そうした研究の一例としては、目下、ルッシュを中心に文学システムの国際比較が提案されている。日本でこうした研究をする場合には、ドイツの事情についての社会学的な調査資料の不足という問題に先ずぶつかる事になる。しかし、この点を克服する事が出来るなら、こうした研究は外国の文化現象を相手にするわれわれにとって極めて意義のある研究となる筈である。

二点目は、ミクロ社会学的な問題である。創作や受容などの様な一次的文学活動とメタコミュニケーション的な活動との関係をテクスト処理の延長関係としてではなく、併存する二つのプロセスと捉えた時、前者と後者の作用関係についても根本的な捉え直しが必要となってくる。プロセスが多重関係にあるという事は、行為者は文学活動において、言わば、もう一つ別の「手」が打てるという事を意味する。メタコミュニケーションに参加する事を通じて、文学についての意識をともに構成しあう事が出来るのである。問題はこの意識構成の持

つ意味である。先に触れたルーマンの説を「念頭」[34]において話を進めてみると、次のように捉える事が出来る。文学はコミュニケーションの主観的な使用を先優価値とした活動である。この活動原理にもとづく事によって、文学はシンボル面では極めてオープンで、また、社会面では多彩なシーンの構成を許すものとなる。どのようなシンボル構造をテクストに持たせるかは作家の主観的な価値実現の問題であり、読者がそれをどう受け取るかも主体的な意味構成や価値判断の問題である。そのプロセスは共感や反感に開かれたものであり、シーンの構成や作品の「成功」を約束するのは、そこでどの様な共鳴のプロセスが生まれるかの問題となる。この開放性ゆえに、文学は時代や世代や社会階層や性別からくる意識や感性の差異に鋭敏に反応する力を持つ。美的実験、娯楽、認識の挑発、この主観的な意味空間の利用のされかたも多様である。しかし、他方で、こうした活動形態は、その＞主観的＜な活動原理ゆえに、＞社会的運営＜の面では多くの問題を生みだす事になる。活動の連鎖が阻害され、まともなプロセス形成がなされなくなるだけでなく、活動の指針や成果の予測が立たなかったり、期待や欲求の充足がおぼつかなかったりする可能性がそこには常に存在する。そもそも、文学といコミュニケーションは開放的であるかわりに、なんら明確な活動基準を与えてはくれないからである。先に述べたように、こうした文学の活動様態が成立したのは18世紀末である。これとほぼ時機を同じくして、美学的議論がはじまり、また、文学批評が制度的に確立される。こう見てくると、次のような仮説が成り立つ。一般に、われわれのコミュニケーションは、われわれ個々の＞認知的＜な条件（言語や世界についての知識）をもとに成立しているものであり、従って、そこには最終的にコミュニケーションの成功を約束づけるような＞客観的＜な尺度は存在しない。むしろ、その成功の基準は、われわれ相互の社会的コントロール（コミュニケーションの成功・不成功の確認、コンセンサスの形成）を通してしか得られないものである[35]。この意味でメタコミュニケーションによる活動の主題化は、本来、あらゆるコミュニケーション活動に付随する一般的現象だと言える。文学の場合、その多様で開かれたコミュニケーション様態のために、一層、安定した了解基盤の確保は困難である。しかし、正にそれが極めて困難であるが故に、尚更、文学ではコミュニケーションを(順次)主題化する作業が必要となる。つまり、その都度の状況の中で多様に展開される文学活動に対して、判断（評価）やコンセンサスの形成を専門課題とするような、「文学」についての議論領域が（しかも、事実上、一次的な文学プロセスに永続的に平行して流れるメタコミュニケーションのプロセスとして）構成される必要が出てくるのである。

18世紀末における文学批評の成立の背景には文学のマスコミュニケーションとしての確立というもう一つの側面がある。こうした状況下では直接、文学活動の全貌を摑む事は個々人には到底不可能となる。従って、その動向（新人や新刊など）についての情報の仲介者としての価値も文学批評は持つ。従って、一般的に捉えるなら、文学批評はマスコミュニケーシ

ョンという観点からも、コミュニケーション様態の点からも、プロセス構成の上で多くの不確実性を持つ文学活動において、情報的に個々の活動を仲介する働きを持つ、と言っておく事が出来る。言わば、文学についての「社会的地図」を提供するのである（例えば、作品像や評価、文芸潮流につけるレッテル、美学的議論、これらはそうした「地図」の構成要素と言える）。ルーマンは象徴的に一般化されたコミュニケーションメディアによって定義され得ない、実際の活動の指針となるような調整領域をプログラム(Programm)の概念で把握している[36]。あるいは、今日の社会学で用いられているように、文化概念を人間の社会的活動を調整するための共通の信念や行動様式の総体という意味で使うなら[37]、文学批評は文学についての文化（文学文化）の構成装置であると言う事も出来る。しかし、それにもかかわらず、社会的コントロールの側面をまず取り上げたのには理由がある。これが慣習とメタコミュニケーションとの関係を捉え直す上で鍵となる視点だからである。「概要」ではもっぱら慣習の作用という観点から両者の関係が問題とされた。しかし、この観点に立つと、この両者間には、より複雑な、矛盾をはらんだ対応関係がある事が見えて来る。そもそも文学の受容はあくまでも私的な体験である。しかし、それが文学についての「批評」であるためには、その体験を直接述べる以上の作業が必要となる。それを一般化し、何らかの価値基準を持ち出したりしなければならないのである。しかし、そうする事であまり文学をドグマ化してしまうと、今度はそれは「文学」についての批評ではなくなってしまう。社会的コントロールと文学というコミュニケーションの様態との両極の板挟みの中に文学批評はあると言える。メタコミュニケーションは文学についての社会的調整要因であるが、そこには文学性そのものに矛盾した逆説的な関係があるのである。この観点から言うなら、そこで構成される文学についての社会的意識は文学という不確定な活動を運営可能にするための社会的仮構と言えなくもない。

では、ここから研究課題に関してはどういう事が言えるのか？まず、一つことわっておかなければならないのは、これまで文学批評を中心に語ってきたが、実際には文学プロセスのあらゆる箇所で文学活動にこうした二次的プロセスは付随している、という点である。そして、それはその都度、文学についての社会的意識の構成母体としての意味を持ってくる。例えば、作家は作品の創作を通じて文学プロセスに加わるだけでなく、その大多数が、常に、同僚、友人、編集者らとの（自分の作品や原稿についての議論を含めた）二次的な「文学についての会話」のプロセスを持っている[38]。作家にとって、自分の活動を確認したり、作家としてのアイデンティティを構成したりするための場として、そうした仲間関係や友人関係は重要だからである。また、同様の事は、読者の側においても言える。読者の場合にも、家庭、学校、同輩グループの中での文学をめぐる活動（の存在）が基本的な文学態度を左右する重要な要因だからである[39]。こう捉えてくると、調査資料という点で、われわれは作品以外に多

くの興味深い対象があるのが見えてくる。批評や文学についてのエッセイ、マニフェスト、文学をめぐる仲間との書簡のやりとり、読者の手紙といったものから、さらには、文学賞の選評のようなものまで。研究課題としては、ここから、こうした資料を手がかりに、個々の社会領域（メディア、グループなど）において代表される文学についての意識、ないし、「文学文化」を探ってゆく事が考えられる。フィーホフは18世紀以降の文学作品内における文学の主題化の問題を取り上げ、それをバンデュラのモデル学習理論を手がかりに、文学内モデル(innerliterarische Modelle)の問題として分析している[40]。文学活動の背景となる「文学」についての意識の問題を扱ってゆこうというのである。しかし、さらに、そこにこうした二次的コミュニケーションの資料をめぐる調査を加える事で、「文学」の意識をめぐるるより広い文脈にに光を当てる事が出来るようになる。つまり、立体的に、その二次的コミュニケーションが置かれた個々の社会領域と相関して資料を分析する事で、特定の文学文化の社会的広がりについての調査を行なったり、あるいは、例えば、書簡で表現される「意識」を創作史と関係づけて追ってゆく事で、創作過程とそうした「意識」とのフィードバック関係を推測する、といった課題が考えられる。一般にこうした「自然」に与えられた言語資料は実験室などでアンケートなどの用意された手法で得られたデータと違って、コントロールされていないという面で弱点を持つ。しかし、そうした自然の言語資料がどのようなコミュニケーション状況に置かれていたものかが分かるならば、逆にそれは不自然な環境で人工的に獲得されたデータにはない妥当性（生態的妥当性(ökologische Validität)）を持つ事になる[41]。メタコミュニケーションが社会的コントロールという側面を持っているかぎり、批評や書簡などの資料を直接的な受容や創作のドキュメントとして取り扱う事は難しい。しかし、二次的コミュニケーションを文学についての社会的意識の構成母体と捉えるならば、そこに置かれたこれらの資料は、受容や創作の背景を明らかにする上でも重要な分析対象として扱っていけるのである。

注

1）この論文は1990年にジーゲン大学のルーミス(LUMIS)研究所で行なった発表に基づいている。

2）Schmidt, S. J. (1980) : Grundriß der Empirischen Literaturwissenschaft. Braunschweig/Wiesbaden.

3）大瀧敏夫(1978)：Metaphorik と Empirische Theorie. 金沢大学文学部論集文学部篇創刊号、吉田光演(1984)：受容行為と加工行為－言語的・文学的コミュニケーションの経験的研究の可能性－。独文研究室報第２号（金沢大学文学部独文研究室）。

4）ただし、大学教育に対する積極的な応用の試みはある：大瀧敏夫／吉田光演(1982)：言語教育と文学教育－「語学」と文学の授業はこれでよいのか－。金沢大学文学部論集文学科篇第4号、を参照。

5）Viehoff, R. (1991) : Annotation zur Empirischen Literaturwissenschaft, in: Viehoff, R. (Hrsg.) (1991) : Alternative Tradition. Braunschweig. 11.

6）Schmidt, S. J. (1980)および Hauptmeier, H. u. Schmidt, S. J. (1985) : Einführung in die Empirische Literaturwissenschaft. Braunschweig/ Wiesbaden を参照。

7）慣習の問題の概略を知るには、Kramaschki, L. (1991) : Anmerkungen zur Ästhetik und Polyvalenzdiskussion der empirischen Theorie der Literatur, in : SPIEL 10, H. 2, 207-230. が参考になる。

8）Meutsch, D. (1987) : Literatur verstehen. Braunschweig/Wiesbaden, 157.

9）Schmidt, S. J.(1989) : Die Selbstorganisation des Sozialsystems Literatur im 18. Jahrhundert. Frankfurt a. M.

10) Vg. Barsch, A. (1989) : The Empirical Theory of Literature and Systems Theory, in : E. Ibsch/D. Schram/G. Steen (eds.), Empirical Studies of Literature. Amsterdam, 355-392, Barsch, A. (1993) : Handlungsebenen, Differenzierung und Einheit des Literatursystems, in : Schmidt, S. J.(Hrsg) (1993) : Literaturwissenschaft und Systemtheorie. Opladen, 144-169, Kramaschki, L. (1993) : Zur Integration von Systemkonzepten in eine Empirische Literaturwissenschaft als kritische Sozialwissenschaft, in : Schmidt, S. J. (Hrsg.) (1993), Rusch, G. (1991) : Zur Systemtheorie und Phänomenologie von Literatur. Eine holistische Perspektive, in : SPIEL 10, H. 2, 301-335, Rusch,G.(1993) : Literatur in Gesellschaft, in : Schmidt, S. J.(Hrsg.) (1993).

11) Schmidt, S. J. (1980), 286ないし Schmidt, S. J. (1991) : Grundriß der Empirischen Literaturwissenschaft (Taschenbuchausgabe). Frankfurt a. M., 338.

12) 彼らとの議論でよく出された例だが、後の箇所で示唆するように、制度的枠組みを度外視して、言語行為の観点のみを手がかりに文学システムへの帰属性を判断出来るかどうかは疑問である。

13) Schmidt, S. J. (1982) : Grundriß der Empirischen Literaturwissenschaft. Teilband 2. Zur Rekonstruktion literaturwissenschaftlicher Fragestellungen in einer Empirischen Theorie der Literatur. Braunschweig/Wiesbaden, 164f.

14) Hohendahl, P. H. (1985) (Hrsg) : Geschichte der deutschen Literaturkritik. Stuttgart, 1f.

15) Vg. Viehoff, R. (1981) : Literaturkritik im Rundfunk. Eine empirische Untersuchung des Westdeutschen Rundfunk/Köln 1971-73. Tübingen, Viehoff, R. (1989) : Literaturkritik 1973 und 1988. Aspekte des literaturkritischen Wertwandels, in : W. Barner (Hrsg.), Literaturkritik-Anspruch und Wirklichkeit. Stuttgart, 1989, 440-459.

16) ジーゲンではフィーホフの仕事が目立つ：Viehoff, R. (1981), Viehoff, R. (1988) : Literaturkritik als literarisches Handeln und als Gegenstand der Forschung, in : Lili 71, 1988, 73-91, Viehoff, R. (1989)、など。他、アムステルダムの研究者のものとしては、Rees, C. v. (1984) : Wie aus einem literarischen Werk ein Meisterwerk wird, in : P. Finke/S. J. Schmidt (Hrsg.), Analytische Literaturwissenschaft. Braunschweig/Wiesbaden, 175-202. の他、文学批評に関する無数の研究が Poetics 誌上に発表されている。他、重要なものとしては：Rosengren, K. E. (1981) : Measurment of Invariance and Change in the Literary Milieu, in : Kreuzer, H. /Viehoff, R. (Hrsg.), Empirische Mehtoden in der Literaturwissenschaft. Göttingen 1981, 52-73, Rosengren, K. E. (1987): Literary Criticism : Future invented, in : Poetics 16, 295-325.

17) Viehoff, R. (1988), 80.

18) Ebd., 87

19) Schmidt, S. J. (1980) もしくは、Schmidt, S. J. (1991) の 5 ・ 4 章を参照。正確にはコムニカート (Kommunikat) (＝テクスト受容の際に認知的に構成されるする意味世界) を出発点にする、と捉えられている。

20) ここでは、N. ルーマン「社会システム論（上）」(恒星社厚生閣) 1993の「日本語版への序文」(i) からの引用。

21) Barsch, A. (1989), Barsch, A. (1993), Rusch, G. (1991), Rusch, G. (1993). Kramaschki, L. (1993). また、「文学の社会史」の研究者の中からは : Ort, C.-M. (1991) : Literaturwissenschaft als Medienwissenschaft, in : Faulstich, W. (Hrsg.) (1991) : Medien und Kultur. Göttingen, 51-61. ジーゲンのグループの社会学者ヘイルのシステム理論は逆にシステムの組織性（＝作用関連）の把握を出発点に置く：Hejl, P. M. (1987) : Konstruktion der sozialen Konstruktion, in S. J. Schmidt (Hrsg.) (1987), Der Diskurs des Radikalen Konstruktivismus. Frankfurt a. M., 303-339, 特に、Hejl, P. M.(1992) : Die zwei Seiten der Eigengesetzlichkeit. Zur Konstruktion natürlicher Sozialsysteme und zum Problem ihrer Regelung, in : S. J. Schmidt (Hrsg.) (1992), Kognition und Gesellschaft. Frankfurt a. M., 1992, 167-213. なお、

ヘイルのもので日本語で読めるものとしては：P．M．ヘイル「社会システムの理論をめざして：自己組織化と自己維持、自己言及と共同言及」、ｉｎ：H．ウルリッヒ他「自己組織化とマネジメント」（東海大学出版会）1992年、88-119がある。

22) Barsch, A. (1993).

23) Rusch, G. (1991), Rusch, G. (1993).

24) Rusch, G. (1991), 317.

25) Ebd., 321.

26) Ebd., (1991), 316.

27) Ebd., (1991), 322.

28) この点については、Hejl, P. M. (1992) も参照。

29) 手短に説明する。社会の歴史的発展の中で個々の共同体の構成論理の枠をこえ社会全体にわたり得る、ある種のコミュニケーションの様態（その特徴は特定の先優価値をコード化させている点にある）が成立する（真実、愛情、所有／金銭、権力／権利など)。ルーマンはこれをパーソンズに従って、象徴的に一般化されたコミュニケーションメディアと名付けるのである。Vg. Luhmann, N. (1975) : Einführende Bemerkungen zu einer Theorie symbolisch generalisierter Kommunikationsmedien, in : Luhmann, N. (1975) : Soziologische Aufklärung. Opladen, Luhmann, N. (1981) : Ist Kunst codierbar?, in : Luhmann, N. (1981) : Soziologische Aufklärung 3. Opladen, 245-266, Luhmann, N. (1986) : Soziale Systeme. Frankfurt a. M, 221-223.

30) Luhmann, N. (1981). ここから、芸術は「分裂実験にかけられているシステム」(269) であるとルーマンは言う。

31) 特にルーマンの理論においてはルッシュが捉えるようなシステムの拡散性の問題はシステム相互の相互浸透(Interpenetration)の問題として捉えられる事になる。しかし、他方で、ルーマンは社会システムをコミュニケーション（のみ）から構成される作動的に閉じたオートポイエシスシステムと捉える極めて抽象的な観点を出発点に置く為に、1）システムをシステムとさせている筈の当のプロセスの作用関連（＝組織性）の把握が軽んじられ、2）意識システムと社会（＝コミュニケーション）システムとの排他関係が単なるその抽象的な理論的な要請から仮説され、3）経験的な調査問題に対しては消極的という傾向や弱点を持つ。ジーゲンのグループはむしろ、コミュニケーションシステムという捉え方には消極的で、行為者を含めて社会システムを構想する立場を取る。ルーマン理論（とその応用）に対するジーゲンのグループの内部からの批判としては、Kramaschki, L. (1993), Rusch, G. (1991), 309-312, Rusch, G. (1993), 183, Schmidt, S. J. (1989), 35-40, Schmidt, S. J. (1993) : Kommunikations-

konzepte für eine systemorientierte Literaturwissenschaft, in: Schmidt, S. J. (Hrsg.) (1993), 241-268, がある。さらに、Hejl, P. M. (1992) はルーマンを含む機能主義の流れと決別する事を提案している。

32) Schmidt, S. J. (1989).

33) そうした研究を行う場合のヒントを与えてくれるものとしては、カノン化プロセスを段階化して分析する Rees, C. v. (1984) の視点がある。

34) 詳しくは論じるだけの紙面はない。要点だけを言うと：このメカニズムの把握で問題となるのは、1）二つのプロセスの複合的な関連と、2）その関連性の場としての行為者の意識、である。そのため、組織性と行為者を軽視するルーマン理論を批判ぬきで、直接的に応用する事は難しいのである。この問題については別の論文で詳しく扱う予定である。なお、文学批評の問題にたいして、より、ルーマンのシステム理論に沿った仮説を立てているものとしては：Jäger, G. (1991): Die Reflexivität literarischer Kommunikation. Zur Rekonstruktion der literarischen Evolution im 18. Jahrhundert als Reflexionsgewinn, in: Faulstich,W. (Hrsg) (1991), 86-95.

35) Rusch, G. (1989).

36) Luhmann, N. (1987), 278, 432f. 特に、Luhmann, N. (1981) では芸術の場合に対し芸術ドグマ (Kunstdogmatik) の概念を使っている。

37) Eisenstadt, S. N. (1990): Kultur und Sozialstruktur in der neueren soziologischen Analyse, in: Haferkamp (Hrsg.) (1990): Sozialstruktur und Kultur. Frankfurt a. M.

38) 具体的調査例としては：Gerhards, J. u. Anheier, H. K. (1987): Zur Sozialposition und Netzwerkstruktur von Schriftstellern, in: Zeitschrift für die Soziologie, Jg. 16,. 5., 385-394, Wittmann, R. G. (1983): Die Schriftsteller und das literarische Kräftfeld, in: Funk, H. u. Wittmann, R. G. (1983): Literatur-Hauptstadt. Berlin, 143-173.

39) Groeben, N. u. Vorderer, P. (1988): Lesepsychologie: Lesemotivation-Lektürewirkung. M nster, 127ff.

40) Viehoff, R. (1993): Selbstthematisierung des Literatursystems. Band 1. Braunschweig/Wiesbaden.

41) Ballstaedt, S. -P. (1982): Dokumenten Analyse, in: Huber, G. L. und Mandel, H. (Hrsg.) (1982): Verbale Daten. Weinheim/Basel, 165-176.

（大学院博士課程）